

会報 おおいた

俳人協会大分県支部

発行所
俳人協会
大分県支部

発行人
俳人協会大分県支部
代表者
小松 生長
事務局
大分市高崎3-13-14
神足方(かみあし律)
(題字:江田 居半)

郵便局振替口座番号
01740-3-24968
俳人協会 大分県支部

「来年度に向けて」



大分県支部長 小松 生長

「一夜さに棚で口あく木通かな」出し抜けですが一茶の木通の句を掲げました。というのも、去る十月二十三日に本年度の秋の吟行大会が宇佐神宮で開催されたのですが、まず参集殿というその会場の立派さに驚かされてしまいました。こんな物音一つしない、塵ひとつない厳かな会場で俳句会が持てるなんて夢のようではありませんか。さらに大絨毯が張り巡らされた会場に入り、正面の活花にも目を奪われてしまいました。その大きな古風な甕には文頭に紹介しました木通の他、檀、山葡

萄、秋葉萸、赤のままなどが秋の野趣たっぷり活けられていたのです。これはなんとこの日の会場のお世話いただいた松本公節さんがご自身で山から採取してこられた活花の大作だったのです。このような驚きの連続で素晴らしい俳句大会の一日が始まったのでした。

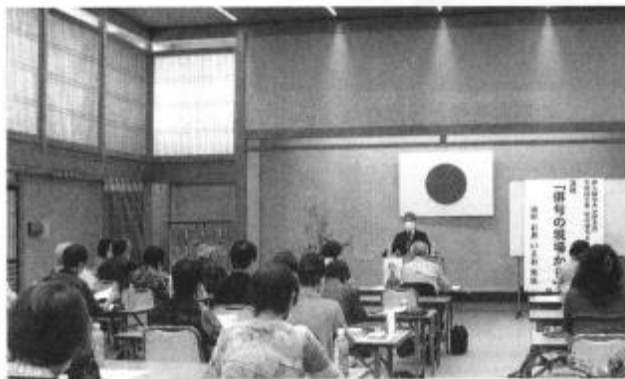
申し遅れましたがこの会場の設営は早朝からの宇佐の夏山句会の皆様のご協力に因るもので大いにこの大会を盛り上げていただきました。改めてここに
お礼申し上げます。

さて対面形式で三年ぶりに開催されたこの大会、相変わらずのコロナ禍で皆さんの参加が危

惧されましたが、事前投句が三四二句、当日句会には四十五名の皆様のご出席をいただきました。この日の講師・選者には三重県より「煌星」主宰の石井いさお先生をお迎えし「俳句の現場から」という表題で俳句の上でつい冒してしまう数多の過ちの指摘などを熱心にご指導していただきました。当日句の選もいただいていたという間の一日でしたが、久しぶりに皆さんの俳句に対する真摯な思いと熱情に接することができ、大分支部としても感動の大会となることができました。本当に有難うございました。

今年も余すところあとわずか

です。いつも申し上げることでありますが支部として「親睦と交流」「個々の研鑽」「地域俳句の興隆」を目標に、来年度も会員の皆さんと共に頑張っていきたいと役員一同思っています。そのためにも来年度には新しく協会支部による結社を越えた会員のための句会、勉強会を立ち上げたいと思っています。新会員の皆さん、また、所属結社が他府県の方々、現在無所属の方々のお力に少しでもなれたらと思っています。御期待ください。



秋の宇佐神宮吟行俳句大会成績―募集句の部―

特選

蓮の実の飛んでくにさき仏みち

大分市 目原 千鳥

石井 いさお 選

準特選

別府湾水平線より時雨来る
川風も共に狩りゆく秋鶉飼
子の両手蛇の長さを言ひ切れず

大分市 かみあし律
三重県 伊藤 孝子
大分市 横山八千代

入選

夕暮の整つて来し月見草
島島をアーチで繋ぐ橋涼し
結局は一つづつ取る草風
青由布の傾ぐ夏野や牛放つ
秋澄むや神話を辿る宇佐風土記
見ゆる風聞こゆる風や秋来たり
水澄みて石も素顔にもどりけり
花葛や見上げ見下ろす千枚田
定まらぬ空の隙間を秋燕
藍染の帯を流して秋の潮

大分市 富川 元女
三重県 松本 愛子
別府市 古賀 宣道
大分市 かみあし律
大分市 吉富 敏子
豊後大野市 小倉 英司
大分市 吉富 敏子
別府市 安藤ミヤ子
三重県 伊藤 孝子
別府市 押谷 隆

特選をいただいて(募集句)

蓮の実の飛んでくにさき仏みち 目原 千鳥

この度は「焔星」主宰石井いさお先生の特選を頂き誠に有難うございました。

毎月お募参りに帰っている時に授かった句です。二十年目にして素直なやさしい俳句が出来たと思っております。

国東に行く時は山の中(31号線)や海岸線、時には高速と、その日によって選んでおります。実家の墓参は一人で列車で帰ります。「木の実落つ御許山より宇佐の宮」御許山には中学の時、遠足で登った記憶と恩師の記憶が蘇ります。

これからも読み聞かせと両輪で俳句を楽しんで行けたらと願っております。



石井先生と目原さん



秋の宇佐神宮吟行俳句大会成績——当日句の部——

石井 いさお 選

特選
玉砂利の音が音追ひ秋惜しむ

宇佐市 松本 公節

準特選

行秋の斎庭の広さたもとほる
敗荷や輪廻の姿水に置く

大分市 竹下百合子
大分市 竹下百合子

入選

天を衝く檜皮の屋根や天高し
玉砂利に跳ぬる日差しや宇佐に秋
蓮の実の飛んで吟行日和かな
旅立ちの神に饒初紅葉
秋天に籠りの日々を解き放つ
天高し神の聲聴く御許山
落鮎や由布源流の水に錆ぶ
鎮まれる弥勒寺跡に聴く秋声
玉砂利の乾く音して秋高し
呉橋を閉ちて秋風通しけり

大分市 岡田 俊英
由布市 土師由布子
宇佐市 田中ひろ子
別府市 堤 節子
大分市 木下 恕子
国東市 吾 亦 紅
大分市 横山八千代
宇佐市 河野二三華
大分市 吉富 敏子
大分市 中尾 豊子

互選賞

玉砂利の音が音追ひ秋惜しむ
蓮の実の飛んで吟行日和かな

宇佐市 松本 公節
宇佐市 田中ひろ子

顧問賞

神社より高き小枝に小鳥くる

国東市 河野美千代

支部長賞

爽やかに拍手揃う一家族

別府市 森本 育子

副支部長賞

謹んで二礼四拍秋高し

宇佐市 田中ひろ子

特選をいただいて(当日句)

玉砂利の音が音追ひ秋惜しむ 松本 公節

この度は、「煌星」主宰石井いさお先生の特選を賜り誠にありがとうございました。

地元宇佐神宮によく遊ぶ者として「地の利・人の輪・天の時」を強く感じ、ただ感謝あるのみです。

神宮での好きな場面は①上宮での四拍手でのお参り②玉砂利を踏む音③鯉の餌やりの情景です。この句は、前日に、無手勝流花生けに行き、絵馬殿で休憩中に賜った句です。七五三などの参詣が割と多く、好きな玉砂利の音を楽しんでいると、「音が音追ひ」に恵まれました。



石井先生と松本さん

そして、主宰の季語のご講演は改めて、身に沁みつつも、楽しいものでした。「季語は厳格に」と大分の先輩女史からの教えを思い出しました。

特選の評



秋篠光広顧問特選

神社より高き小枝に小鳥くる 河野美千代
高きと表現したことにより、崇高さが感じられた。宇佐八幡宮ならではの緊張感もある。遠い国から渡ってきた色鳥の光だ。



小松生長支部長特選

爽やかに拍手揃う一家族 森本 育子
参拝する子供連れの家族。その一家を遠くから眺めながら作者はすでに果立っていった己れの子供達とその頃の生活を思い出した。その家族の打つ拍手がびたりと揃い、秋の気と呼応して清々しく作者の胸に響いて来るのだった。



亀田多珂子副支部長特選

謹んで二礼四拍秋高し 田中ひろ子
二礼四拍の拝礼を終え、身も心も清々しく高々と澄んだ秋空を仰いだ時の感動が無駄のない率直な一句に纏められた。



大会報告

穏やかな秋日和の十月二三日、大分県支部秋の吟行俳句大会が三年ぶりに行われた。会場の宇佐市「宇佐神宮参集殿」には四五名の参加者を得て、選者・講師に俳人協会評議員の石井いさお先生（煌星「主宰」）をお迎えしての開催となった。

支部長の挨拶に続き、募集句の表彰の後、「俳句の現場から」と題しての講演では、二五項目に分けて季語の読みと季語にも別の意味があることをユーモアを混じえながらお話された。普段は季語について深く考えることなく作句しがちな私たちが今後は季語の本質を知ることと違った見方が活かされるのではと再認識させられる講演であった。

午後の句会を終えて当日句の表彰があり、懇切丁寧な講評を頂き、会場の厳かな雰囲気の中、肅々と大会を終了した。

（押谷 隆）

※募集句

- 投句数 四三二句
- 投句者 一〇一人
- （会員）二五六句 七〇人
- （一般）八六句 三二人
- ※当日一人二句投句
- 参加者 四五人
- （会員）三九人
- （一般）六人

お詫びと訂正

五月の「春の俳句大会」に於いて互選賞を四句としましたが、五句でした。作者に大変失礼をしました。ここにお詫びと訂正を申し上げます。次の俳句を「互選賞」に追加致します。

「新樹光手に真つさらな母子手帳
小野瑞季」

講演「俳句の現場から」石井いさお先生講演要旨

季語について

- 1 読み ①赤棟蛇 ②飯匙倩
- 2 傍題 ①蟪蛄〓かまさり、いほむしり ②蟋蟀〓ちちろ
③寵馬〓いとど ④ばつた〓はたはた
- 3 〇茶を摘む ×お茶を摘む、 〇時雨忌 ×時雨の忌
- 4 鯛、亀、鶯、鯉の季節は？
- 5 秋の夜と夜の秋。どう違う？ 秋深しと秋深むは？
- 6 雨ツバメとツバメの関係は？ 花筏 半夏生 雪虫
- 7 茂りは木、茂るは草茂る
- 8 若葉だと新緑、木立だと新樹
- 9 独楽は新年、べい独楽は秋 海螺廻し 凧
- 10 鼓虫は水澄し、水馬はアメンボウ
- 11 かざぐるまは春、ふうしゃは無季、水車は無季
- 12 竹伐るは秋、竹八月に木六月(旧暦) 〇竹酔日
- 13 入梅は立春から数えて一三五日目(六月十一日ごろ)
〇八十八夜、二百十日
- 14 海鼠は「こ」、このわた。葱は「き」、玉葱。蚕は「こ」、毛蚕。
- 15 ホトトギス四兄弟〓時鳥、筒鳥、郭公、〇もう一つは？
- 16 △濃紅葉(5音) 〇濃き紅葉、 △火恋し 〇火の恋し



季語の大切さを話す石井いさお先生

- 17 雪中花は水仙、遊蝶花はパンジー、月下美人は？
- 18 夕焼けは名詞。△夕焼けてとか夕焼くる。〇夕風 ×夕風ぐ。
〇しぐる、〇みぞる。
- 19 〇柚子坊は何？、鬼の子は？、いほむしりは蟪蛄
冬服は洋装、冬着は衣服一般(着物も含む)
×4音と3音(語呂合わせ)
- 20 袖無しは①甚平なら夏、②ちやんちやんこなら冬。
- 21 白魚と素魚の異同？ 菖蒲と花菖蒲？ 夕顔と夜顔？
- 22 寒がついていても冬とは限らない。寒露は秋、寒蟬は秋(かなかな)
- 23 〇苺、甘酒、目白、蘭の季節は？
- 24 その他 ソーダ水とコーラ、寿司と回転寿司、髪洗ふ
- 25

※用例は諸誌から参照しました。



ようこそ俳人協会へ

令和三年度新会員



東久仁代
(青嶺・朝鳥)

俳句は心の杖

「青嶺」の岸原先生の方へ投句している時に、同人の安藤ミヤ子さんが、句会においでと声をかけてもらい「朝鳥」句会の一員となりました。秋篠先生は心の広い穏やかな方で、結社異なるみなさん方をまとめています。俳句のレベルも高く、初めは戸惑いもありましたが、やがて行って行けるようになり素敵な句友もでき楽しい句会に感謝です。「青嶺」も句友になった方と同人になれて嬉しく年長者の素敵な方々と知り合いました。二十周年記念句集は二百八名の方々の一人二十句をまとめられ岸原先生の力に感動です。リーダーとして岸原先生と秋篠先生に出会った私は幸運です。俳句を心の杖として毎日感謝の日々です。

俳人協会の皆さま宜しくお願いします。

大マスク白衣を脱げば母の顔 久仁代



小野瑞季
(水輪)

子ども俳句教室

近くに住む知り合いに勧められ、公民館活動の俳句会に入会したのが俳句とのかかわりの始まりです。とりたてて知識があるわけでもなく、季語が入っていればよいと考えるレベルでした。八割は女性という句会で、先輩諸氏に手取り足取りご指導戴きました。

町の教育委員会の活動の一環として「放課後子ども教室」が始まり、句会も俳句教室の手伝いすることになりました。水曜日の放課後学校に行き一時間ほど子どもたちと一緒に俳句を詠む会でした。倉田絃文先生の「落の臺集」に子どもの作品が掲載されるとみんなで喜び合いました。月に一、二度の会でしたがとても楽しみにしていました。

俳句を始めて十数年がたちますが、俳句の奥深さを知り、やっとスタートに立てたところで、このような時に俳人協会の仲間入りが出来て、とても光栄に思っています。ご指導よろしくお願ひいたします。

新樹光手に真つきらな母子手帳

瑞季



草津洋一
(水輪)

倉田先生あればこそ

六五歳の時、左腎臓癌の摘出手術を受けました。それを機会に仕事を辞め、年金生活になりました。「何か趣味を持たないとボケてしまう」と思い、以前から興味があった俳句をやるうと思いいちちました。

若い頃、従兄の結婚式の司会でご縁を頂いた倉田絃文先生を頼って、NHKの俳句教室に通い始めました。絃文先生の洒落な話術に接するのが楽しみでした。

先生がお亡くなりになった後、思いもかけず「水輪」への加入を勧められ、曲りなりにも編集部の一員として身を置いています。これも、亡き絃文先生のお導きかな？と感じている昨今です。

後期高齢者に仲間入りし、腎機能の劣化で、編集部の方々の足手まといになっているのではないかと恐縮しています。

それでも自分が出ることをして、僅かでもお手伝いが出来たらと思っています。

代表句という程のものか分かりませんが、絃文先生から褒められたものを一句・一。

伊勢志摩の寒月高く海照らす

洋一

坂本テル子
(柚子)

俳句に誘われて

文を書いたり、読書をするなどあまり縁のない生活をしていた私に、俳句教室を始めるのと誘いがかかり、できるかなあと思いながら、江田居半先生の柚子句会に入会したのが十三年前。先生亡き後は、娘さんの智子先生の指導を受け句会の仲間に支えられながら俳句を楽しんでいます。句会では兼題、自由句、その他で毎月十句投句、エッセイなど、文も書き、句会が終り三、四日すると智子先生の編集した写真入りの「ゆず」の小冊子が届きます。今月で八十三年になります。毎回届くのが楽しみです。エッセイなどは編集の仕方、写真(各自でメールで送る)が入ることでステキなページになります。

五衛門風呂どりと溢れて大枯野 テル子

令和四年度新会員



江藤江野

私事

五十五歳の時に俳句を始めました。由布院句会の松尾墨丈先生から倉田絃文先生(「落」主宰)の南小国句会に誘われて参加したのがきっかけでした。父・都月は野見山飛鳥先生の「菜殻火」で俳句をたしなんでいましたが、その頃は私はまだ始めていませんでした。現在は「由布院句会」の十数人の句友とともに月一度の句会を開催して、由布院の四季の美しさを俳句にして楽しんでいます。母の実家由布院の仏山寺も吟行にお立ち寄りください。

竜胆の上を大きな風通る

江野

小野蒼水
(水輪)

気の向くままに

大分合同新聞の読者文芸欄に妻が投句しているのに刺激されて俳句を始め、ちょうど十年になりました。性格の違う妻と共通の趣味となりました。

どこの句会にも属さず、勝手気ままに句作しても、もっぱら合同新聞に投句しています。リタイアすると外出の機会も減ってしまい、毎日、朝夕二回の犬の散歩を兼ねたウォーキングが私の吟行となっています。

令和元年に水輪に入会いたしました。句誌掲載の句や選評を読むことで、私なりの誌上句会としていきます。

私のせつからで偏屈な性格と真逆な、素朴、誠実、謙虚、平明かつ時情がにじみ出てくるような俳句を作ることを目指しています。目標は遠大ですが、じつくりと焦らず楽しく句作を続けていきたいと思っています。

ぐらぐらと蟹の穴鳴く春の海

蒼水

モノクロの卒業写真動き出す

蒼水



河野二三華
(水輪)

俳句は活力

俳句を始めたきっかけは、母（九十二才没）の遺した古びた大学ノートの俳句からでした。奥深い山間に一人住み、四季を通じての質素な暮らし振りが、ご近所の方（皆さん高齢）の優しい声かけ見守りが、手を取る様に解かりました。同じ町内に居ながら母のことを何も知らず、全てが衝撃でした。

俳句を始めて何より嬉しいのは、多くの方との出会いと市内の旧所・名所の吟行で新たな発見と感動を味わえることです。

俳句により、毎日が新鮮で心に張り合いが出来、何事が起ころうとも乗り越えて行けそうな気がします。

俳句は私にとって活力であり、健康寿命を延ばす為にも生涯学習として、頑張ろうと思っています。

宜しくお願致します。

謎に解け込む早春の日差

二三華



吉川さち子
(少年)

絃文先生との出会い

倉田絃文先生との出会いは、昭和五十九年の初夏の頃だったと思います。後に大変お世話になることとなった俳句「落」の大先輩に誘われ、初めて別府の句会に出席しました。「とにかく二句でも三句でも作っておいで。」と言われ、二句作って行きました。当然誰にもとって頂けず、帰ろうとすると「先生に見て頂こう」と呼ばれて、先生の前へいききました。先生は「鶴鶴の声の間に朝の窓一を」鶴鶴の声の間に窓の朝一と変えて下さいました。そして「風景が変わったのが分かりますか？」と私を見て言われました。私は、「ああ！これが俳句というものなのか！」と驚き、すぐに「落」に入れて頂き勉強することになりました。以後多くの俳縁をいただき今は、日出町で、絃文先生の立ち上げて下さった句会を大事に続けさせて頂こうと頑張っています。

目を閉じて霧水とけゆく音の中

さち子



◆編集後記◆

▼世の中が明るくなってきたと感じるのは私だけでしょうか？新型コロナの状況が好転したわけでもないのに、三年前の暮らしが戻ってきたようです。足踏みしていた行事や各地の催物が復活し、人と会うことや旅行の計画も憚られることなく進められます。我家も三年ぶり息子一家が正月帰省となりました。

▼十月二十三日の「宇佐神宮吟行俳句大会」は、穏やかなよく晴れた日で七五三の子の着物が緑の神宮に映えて本当に美しい一日でした。会場の参集殿は神社建築を内部から体感できる素晴らしい建物でした。思い出に残る句会でした。やっと戻ってきた風景に心が安らぎました。

新しい日常が始まりました。

(律記)

俳人協会大分県支部
会報「おおいた」第四十五号
令和四年十二月発行
発行人 俳人協会大分県支部
編集人 小松 生長
かみあし律
事務局 千八七〇一〇八七二
大分市高崎三ー一三ー一四
かみあし律
印刷所 〇九七ー五四六ー二九三四
株大分出版印刷